風の末裔シリーズ・６th シーズンの４

～残り雪～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

「見えたよ、あの峰さ」
前を行く黒砂糖色の栃栗毛に跨がった青年が、連なる山々の奥の、ギサギザ峰を指差した。
「あれが三峰」
青年は、白い髪に負けない白い歯を見せた。カーリが、彼の中で三番目に好きな箇所だ。
「じゃあ、今日中に着けるか?」
カーリは峰の窪みに残る残雪にワクワクしながら聞いた。早くあれに触れてみたい。
「チッチッ、山ってのは、見えてからが遠い。まあ、あと三日はかかるかな」
「そうか…」
「もう暫くはカーリと旅が出来る。はっは!」
白い青年は軽やかに笑った。この、マイナスに思える事も楽しい風に考えちゃう所が、二番目に好きな箇所だ。

「旦那、運がお悪い。今日はお泊めする事が出来ません」
通り道の小さな村の宿屋の主人は、申し訳なさそうに断った。
「ありゃ、どしたの、お休みかい?」
「いえ、祝い事です。明日、婚礼の儀式があるのです。花嫁が外の部落から来た者なので、親族で部屋が埋まっているのです」
「あ、そう…」
「フウヤ、わらわは野宿でもよいぞ」
「うーん」
「あの…」
宿屋の奥から、若い男女が出て来た。林檎みたいな頬をした、まだ少女っぽい女性の方が言う。
「私どものせいで旅の方にご迷惑をかけるのも…、ご婦人もいらっしゃるのに」
「ねぇ、君の兄さん夫妻、僕達の家の寝室に泊まって貰ったらどうだろう? そうしたら一部屋空きますよね」
「いい考えだわ」
どうやら明日の主役らしいこの二人は、今晩のベッドを明け渡して、台所の土間あたりで寝る事を、屈託なく相談している。通りすがりの赤の他人の為に。
旅をしていると、こんな『無償の好意』を、まま受ける事がある。旅が長いとそれに慣れ、感覚が麻痺して、好意に気付かなくなりがちだ。でもフウヤがそうではないのを、カーリはよく知っていた。
明け渡して貰った部屋にカーリ一人残し、フウヤは一晩帰らなかった。カーリは大人しく黙って待っていた。彼と付き合っていると、こんなのはしょっちゅうなのだ。

翌日の婚礼の儀式は凄いコトになった。
近隣の大きな街からやって来た楽隊と吟遊詩人が歓びの唄を奏で、芸人達が所狭しと飛び回って宙返りをした。子供達には菓子が配られ、様々な屋台が無償で料理を振る舞った。
花吹雪の中、若い夫妻がビックリ仰天して何かの間違いではと問うと、既に代金は貰っていると答えた料理人の一人はこう言った。
「天使のくじ引きに当たったらしいですよ?」

村が大騒ぎに溢れている頃、旅人の二人は、既に遠く離れていた。
「やれやれ、金貨、だいぶん余っていたの、これで使い切れた」
「そうか、よかったな」
「寝てないからヘロヘロ」
「少し休むか?」
「うん、カーリ、ひざまくら!」
「甘えんぼだな」
木陰で馬を止めて、ソバージュ娘の膝枕で、フウヤは本当に熟睡してしまった。
「面白いオトコだな」
出逢って暫くして、それに気付いた。

このヒトは金貨に執着しない。逆に、なるべく早く身から離そうとする。
大評判のフウヤの天使像は、注文が後を絶たない。そんなに金貨が要らないんなら、無償で受ければいいのだろうが、その辺は他の職人との兼ね合いから、そうも行かないらしい。
心付けでいいですよと言っても、出来上がった天使像を見た依頼主はケチる気持ちをなくすみたいで、金貨が無造作に放り込まれた袋は、一冬で結構な重さになる。
それらを、毎年三峰に帰るまでに使い切ってしまう。その使い方も彼なりの法則があって、施しの形を取らない、誰がやったか分からない、貰った側に負担に思わせない、形が残らない、…等だ。
「面倒だな」
前にそう言った時、フウヤは大真面目に答えてくれた。
「そう、お金を使うって面倒だ。前にまるごと慈善施設に寄付した。そしたら施設の経営者が僕を追い回すのに躍起になって、施設の経営がおざなりになった。行く先々で振る舞ったら、よからぬ連中に付け狙われた。ホント、厄介だよ」

アブクみたいに遣っちまうのが一番さと、投げやりにうそぶいていた彼の寝顔を眺めながら、カーリは膝を揺らさぬよう、

じっと座っていた。
新婚の二人にとっては、家財道具とか形ある物の方が、気の利いた贈り物といえるだろう。フウヤの金貨の使い方に眉を潜める者もいるかもしれない。しかし全くのアブクでもないと、カーリは思う。
雇われた物達は思わぬ収入にホクホクだし、村人や子供達は楽しい一時を過ごせ、あの新婚夫婦には、後々語り継げる忘れられぬ思い出となったろう。
それらは後々、何処かで誰かの幸せに繋がるかもしれない。意識してるのかしていないのか分からないけれど、このヒトの金貨の使い方って、そうなのだ。

「いざという時の為に貯めておこうとは思わないのか?。とっておけばよかったって、後悔するのは怖くないか?」
意地悪くそう訊ねた事もある。
「そうだね…、でもさ、いざという時って、実は人生にそうそうない。そして本当のいざという時って、金貨とか、あんま役に立たない。以前の黒死病の大流行、病は貧富を選んだか?」
「……」
「その時後悔するのは、きっと別の事だよ」
「……」

「だけれど金貨がもたらすモノはある。欲と争い」
過ぎた金貨の怖さを知っている彼は、本当に大切にしたい友人との間には金貨を挟まない事にしている…と言った。
それを聞いてカーリは、フウヤが自分が何を欲しがっても買ってくれなかったのを思い出して、ちょっと嬉しくなった。
「だから僕は、余計な金貨は、三峰に持ち込みたくないのさ」
では、この面白いオトコが、毎年冬、愛する三峰を離れて、天使像を造って回っているのは何故か? それはカーリは、よく知っていた。
出来上がった天使像を眺めるヒトビトの、穏やかな顔、顔、顔……。
離れた所からそれを見つめて、このヒトは何ともいえない表情をする。やり遂げた満足感とか、皆の反応に対する、満悦の表情ではない。
ただただ真摯な瞳…、畏敬のような、信仰のような。そう、まるで、ヒトビトの中に天使を見ているような。
そんな時のこのヒトの横顔が、カーリの一番に好きな箇所だ。

＊＊＊

三峰の峰が見えて三日目の朝。
空気がシンと冷え、ずっと登っていた道がなだらかに変わり、周囲が明るくなった。

「高度が上がって来たんだ。もうすぐ尾根だよ。キツイのはここまでだ。よく頑張っ…・・?!」
双方の馬に声を掛けかけて、フウヤはハッと顔を上げた。
空気が震えた。続いて谷にこだまする鋭い指笛。
「な、なに?!」
「狩りだ!!」
フウヤが目を輝かせて、尾根を見上げた。
上方から何かの気配が迫って来たと思ったら、周囲を複数の人影が駆け降りて行った。あっという間だった。足音もしなかった。一拍後、谷で動物の悲鳴が短く響いて静かになった。
「仕留めたな。多分、一番弓はヤンだ」
「ヤン?」
よく覚えている。ビックリする程澄んだ眼の、フウヤの親友だ。フウヤが砂漠へ来始めた最初の数年、一緒だった。
「いただろ、今駆け降りた、先頭に」
「いたの?、早過ぎて見えなかった」

馬を止めて話している二人の前に、下から登ってきた集団が姿を現した。
「ひっく…!」
カーリは思わず喉を鳴らしてしまった。

男達は木の棒にくくりつけられた大鹿を担いでいた。鹿は、一刻前まで生きていたのが嘘のように、血濡れた胴体から棒みたいな脚を突き出している。狩人達は皆、口を結んで怖い顔をしていた。
「フウヤ…」
知った声に振り向くと、狩猟化粧をしていたが、覚えのあるヤンがいた。カーリはちょっとホッとした。
「ヤン、ただいま」
フウヤが小さな声で言った。
「ああ…」
会話はそれだけで、ヤンと集団は、二人をおいてどんどん登って行ってしまった。
「???」
カーリは戸惑った。ヤンはフウヤの親友じゃなかったの?。彼女の知っているヤンは、気さくな優しいヒトだ。
(まさかケンカしているの? それとも自分を連れている事が、何かの問題があるのだろうか?)
にわかに不安になった。
集団が通り過ぎた所で、フウヤが顔を上げた。
「僕達も行こうか」
「う、うん…」

フウヤは飄々と馬を進めたが、カーリは段々に気持ちが沈んで来た。もしかして、このヒトは自分の為に、何か掟を破ってしまったのでは…？

尾根の小路を少し下った所に、三峰の部落があった。

狩猟と養蚕で生計を立てる、小さな部落。広場ではさっきの集団が、大鹿を中央に輪になっていた。白い羽飾りの女性が、二本のハシバミの木の枝で獲物の表面を祓って、祈りを捧げていた。

女性が祝詞(のりと)を唱え終わると、狩人達の一団は一斉に踵を返して走り出した。

部落の入り口で下馬して、フウヤの後ろに隠れるように歩いていたカーリは、迫り来るさっきの集団にギョッとした。

狩人達はたちまち二人を取り囲んだ。

「フウヤァ!!　何だよ、この可愛い子ちゃんは。生意気だぞ、フウヤの癖に！」

「うおおおお！　チキショウ！　てめえには百万年早いってんだ！」

「お嬢ちゃん、早まっちゃいかん、こいつの性格の悪さを知らんだろ?!」

「え、え、え?」

「ストーップ！」

ヤンが叫んだ。

「まず長旅のお嬢さんを休ませてあげよう。何にしても族長に挨拶だ」

ヤンはそれだけ言うと、後は駆け寄って、細っこいフウヤが吹っ飛ぶ勢いで抱き付いた。

「お帰り、フウヤ！　こいつぅ！　早く冷やかしたくて、今にも掟を破りそうだった」

山から命を貰っている狩猟の民は、獲物を部落へ運び帰って魂を弔うまで、談笑したり他の話をしたりしない。だが、この日ばかりは皆、純白の馬に跨がった飴色の肌の娘が気になって気になって、弔意どころじゃなかったらしい。

皆に囲まれながら、カーリはフウヤに連れられて、部落長に挨拶に行った。

鷲羽の首飾りを付けた逞しい部落長は、フウヤの肩をバンバン叩き、遠来の娘の手を取って歓迎してくれた。

カーリは、さっきまでの不安が嘘みたいに洗い流されて、安堵の気持ちで一杯になった。よかった、いいヒト達。自分はきっと、上手くやって行ける。

フウヤが部落長と長話があるというので、カーリは先に外へ出た。
狩猟仲間の間で、ヤンが手招きしている。導かれるまま輪の一角に座った沙漠の娘の前に、木の椀が回されて来た。
「なに?」
覗き込んだ瞬間、グッとなって口鼻を押さえた。本日の獲物の臓物を煮込んだ汁物だ。
「命を奪う業を、皆で分けて背負うって意味があるんだ」
ヤンが隣で説明して、真っ青なカーリを気遣った。
「無理しなくていいよ」
「い、いや…、わらわは、此処の、者に、なるの、だから・・い・た・だ・・・・・」
カーリは目を白黒させながら、椀に顔を近付けた。今まで経験した事のないギトギト油の臭いが、鼻を伝って身体中に這い寄って来る…。
「・・・・・・・・・・」
＊＊＊
「座った形のまま失神するなんて、随分器用なのね、フウヤのカノジョ」
女性のよく通る声がする。何処かのベッドに寝かされている。そうか、臓物の脂を見て気が遠くなったんだ。情けない…。
「でも、大丈夫なの? 臓物の臭いだけで気絶しちゃうなんて、どんだけお姫様なのよ?」
声は隣の部屋からで、カーリはベッドで身を固くした。
「いいんだよ、カーリはお姫様で」
フウヤの声。
「臓物どころか、赤ん坊の頃から、血肉の類は口にしなかった。修道院で育ったんだから」
「あ、あら、そうなの? ごめんなさい」
「謝る所じゃないよ。修道院育ちは素敵な事なんだよ。何たって、カーリは天使なんだ」
「??」
最後の意味が分からなかった。天使…?
「僕、至急自宅に戻らなきゃならないんだ。族長が使っていないベッドを譲ってくれるって。置き場所、作らなきゃ」
「お父さんが? あ、じゃあ、私が子供の頃に使っていた白いベッドかしら」
「その間、悪い、カーリを頼む」
「だから、普段から掃除しときなさいって言っていたでしょ。ついでに天使に見られたら困る物も、ちゃんと処分しておくのよぉー」

女性の言葉の語尾は尻上がりで、近しい者にじゃれて言っている感じだった。

扉が開いて、黒檀みたいな真っ黒な髪の女性が入って来た。

「あら、起きたのね、大丈夫？」

さっき、獲物に祈りを捧げていた、白い羽根飾りの女性だ。

「大丈夫…」

カーリは起き上がって、ベッドから降りようとした。

「まだ休んでいなさいな。疲れてもいたのよ、きっと。フウヤってマイペースだから、着いて来るの大変だったでしょう」

「そんな事ない、フウヤは優しい！」

飴色の肌の娘の頑なな言いように、女性はちょっと止まったが、すぐ平常な顔をして、持参した水差しから、コップに水を注いだ。

「・・あのね、あたし、シータ。フウヤとは、子供の頃からの友達なの。普通に、ト・モ・ダ・チ」

水を渡しながら爽やかに微笑み掛けられて、カーリは頬が熱くなった。この村の者なんだから、軽口叩き合う女性の友達くらい、いたって当たり前なのに…。

シータは、黒髪に白い羽飾りの似合う、魅力的な女性だった。象牙色の額に黒曜石みたいな瞳。きりりと結い上げられた長いポニーテールは、墨で線を引いたみたいに真っ直ぐだ。

カーリは急に、それまで気にも止めなかった、頑固に広がった自分の癖っ毛が恥ずかしくなった。
ほら、自分は、天使なんかとは、程遠い…。

扉がノックされて、先程会った鷲羽の族長が入って来た。ここは族長の自宅で、シータは族長娘だった。
立ち上がろうとするカーリを族長は優しく制し、部落の慣習に馴染もうと努力した彼女を誉めてくれた。しかし誉められる程に居心地が悪くなって、送ってくれるというシータを断って、逃れるように暇(いとま)した。
外の眩しさで、まだくらくらする。道々、皆が振り返る。当たり前だと分かっていても、何だかイライラした。

教わったフウヤの住居兼アトリエは、桑畑を通り過ぎた部落の端ッコ…垂直に落ち込んだ崖の側にあった。
昔の養蚕小屋を改装したもので、売れっ子芸術家の自宅とは思えない質素さだった。
中を覗くと、フウヤはいなかった。掃除がやりかけな感じだ。足を踏み入れて、立て掛けられていた箒(ほうき)を手に取った。
ガランとした部屋の壁には、様々な土地の地図が、上から下までびっしりと貼り付けられている。この土地全部に行ったのだろうか？　自分の知らない色んな土地を見て、自分の知らない沢山の友達がいるんだろうな…。
隅に小さな厨房、奥に背の高い書棚とベッド、幾つかの木箱に今詰め込まれた感じで、沢山の巻紙が刺さっていた。
「今日からここで暮らすんだ…」
奥の大きめの窓からは、残雪のある谷の斜面が見える。フウヤの好きそうな景色だった。自分も好きになれるだろうか。やっと落ち着いてきて、明日からの生活への実感が湧いて来た。

・・・・??・・

気配を感じた。
引き寄せられるように、足が部屋の奥へ動く。開けられた窓から埃っぽい空間に陽光が伸び、壁際の書棚をぼんやり照らしている。
気配は、その棚の中頃からする。他には物がびっしり詰まっているのに、その段だけスッキリしている。真ん中に何か置いてあるが、布が掛かって隠されている。埃がないのは、帰宅して一番に、そこだけ掃除したのだろう。
「……」
好奇心の手が伸びて、その紫のしじらの布を、はいだ。
「えっ…?!」

布の下は、拳大の木彫りの人形だった。背を向けて置かれていたが、粗い彫りは、フウヤの手の物とは違う。
それよりカーリの目を釘付けにしたのは、人形と向い合わせで奥に立て掛けられた鏡だった。
最初、鏡だと思わなかった。だってそこには、向かい合っている人形とは別のモノが写っているのだ。その後ろに自分がぼんやり映っているので、やっとそれが鏡だと気付き、人形が何かを宿した魔法の物だと呑み込めた。
《フウヤ…？》
鏡に写った、その『別のモノ』が、口を開いた。人形サイズの小さな女性…。透けるような白い顔も、紫のふうわりした髪も、魔法の絵本から抜け出たみたいな美しさ。声も鈴を振ったようだ。
《戻ったの、フウヤ…　元気だった？　怪我はない？　貴方がいないと、本当に寂しいわ…》
「・・・・・」
カーリはこわばった両手を、後ろ姿の人形に伸ばした。
＊＊＊
「そこ、危ないわよ」
フウヤの自宅の裏手、崖の端で声を掛けられて、カーリは小さく飛び上がった。黒髪のシータが風呂敷包みを抱えて、数歩後ろの柵の向こう側にいる。
カーリは崖ギリギリに立ち、遥か眼下の川の流れを見下ろしていた。
「なかなかの景色でしょ。でも、柵を越えちゃ駄目。そこ、地面の下がえぐれているのよ」
ソバージュ娘は足元を見て身震いし、慌てて柵の所まで戻って来た。
「フウヤはベッドを運ぶ荷車を取りに行っているわ。行き違っちゃったわね。あら、それ？」
言われて、カーリは自分の手の中の紫のしじらの布包みを、今初めて気付いたように凝視した。
「フウヤのお姉ちゃん人形ね。びっくりしたでしょう？」
「…えっ？」
「最後に目を合わせたヒトを宿して、鏡に映してそのヒトの心を喋る魔法人形ですって。離れて暮らしている大好きなお姉ちゃんにいつでも会える、フウヤの宝物。ま、多少のシスコンは大目にみてあげなさいな」
「・・・・・・」
なるべく軽い感じで話しかけているのに、この飴色の肌の娘はダンマリのままだ。シータはそういうのは苦手だった。
「ね、貴方、その人形に変な勘繰りをして、持って来ちゃった

んじゃないの？　駄目よ、そういうの。フウヤに聞いてみれば済む事じゃない。ほら、よこしなさい」

手を伸ばして布包みを引ったくろうとするシータに、カーリは予想外に抵抗した。それで、シータもついムキになった。

＊＊＊

「昼間、桑畑の方へ歩いて行くのを見た時、表情が固くて変な感じだったわ。その後シータが、日用品を届けてあげるって貴方の家へ向かったから、最後に会ったのはシータじゃない？」

もう暗くなるというのに、部落の何処にもいない飴色の娘を探すフウヤに、洗濯場のおかみさん達が告げた。

「ね、君、カーリと何かあったの？　来たばかりなのにいなくなっちゃうなんて、普通じゃない」

部落周りを一通り捜したフウヤが、族長宅玄関で、シータを問いただしていた。

「彼女、まだ帰らないの？」

シータは困った顔で口ごもっている。

「会うことは会ったけれど…、ちょっと立ち話しただけだわ」

「シータ、君の『ちょっと』は、たまに『ちょっと』じゃないんだ」

「何よ、私の口が一言多いって言いたいの？」

二人が言い合っている所に、ヤンが駆け込んで来た。

「今、皆で山を捜す算段をしている。僕達も行こう、フウヤ」

「待って！」

シータが決心したように二人を呼び止め、家の奥から紫の布包みを持って来た。

「…？　何でこれがここに？」

いぶかりながらそれに触って、フウヤは息を呑んだ。布の上から、中の人形がバラバラに砕けているのが分かるのだ。

「昼間ね、カーリが、持ち出していたの」

シータは眉を寄せて、フウヤを見た。

「多分彼女、自分じゃない女性の人形を貴方が大切にしているのを見て、ムカッとして捨てようとでもしたんだと思う。で、私に見つかって取り合いになって…」

「……」

「落ちた所が石の上だったのも、その上に、よろめいた私のカカトが降りたのも、不幸な偶然だったのよ。ワザとじゃないわ」

「……」

「でも、そもそもは、彼女が持ち出したのが発端でしょ。彼女、私に、人形が貴方の大切なお姉ちゃんだったって聞いて、貴方に合わせる顔をなくして、途方に暮れているのよ、きっと」

「……」

「ね、そのくらい許してあげましょうよ。説明しておかなかった貴方も悪いのよ」
「…・・・・・・…」
目を見開いて硬直しているフウヤの横で、ヤンはヒヤヒヤした。シータや他の村人は、フウヤの故郷の戒律が厳しくて、彼が二度とお姉ちゃんに会えないのを、知らない。
「…行こう、ヤン」
フウヤが何も言わずに、シータに背を向けた。ヤンもシータを振り返り振り返り、彼を追った。
黒髪の娘は、二人が見えなくなってから、ため息ひとつついて、家を出て桑畑の方へ走った。
＊＊＊
・・・ヒュ――――イ!・・・
飴色の肌の娘は、遠くの指笛に顔を上げた。
いなくなった自分を、誰かが捜してくれているのかもしれない。しかし、彼女の足は、どんどん谷への道を降りている。
左右に湿った地面が迫る、小さな流れの谷底に行き着いた。窪んだ日陰に残った雪が、シンシンと冷気を立ち上げている。月明かりに浮かぶ晩春の残雪は、埃やゴミが目立って、ちっともきれいじゃない。
「これは、神サマの創った色とは違うんだろうな…」
遠くから見ると山陵に美しく映える雪も、近寄って見れば、案外灰色なんだ…。カーリは憑き物を落としたいように、両腕で肩を抱いて身震いした。
慣れない足が、残雪の空洞を踏みいて転んだ。倒れ込んだ雪の上の冷気が、身体の芯まで突き通る。
「つ・め・た・い…」
砂漠で育ったのに、何でこの言葉を覚えたんだっけ…?
擦りむいた手の中のザラメ雪をぼうっと見つめる娘の背後から、ドロリと赤黒い影が忍び寄った。
「・・?!」
不意に目前に、女性の白い手が差し出された。
顔を上げるとそこにいたのは、月を背にした黒髪のシータだった。逆光で表情が見えない。驚くカーリに、促すように手首を上下させる。
「……」
おずおず差し出した手を、白い指が乱暴に掴んだ。
??　凄い力だ?!　そのままぐいっと引き寄せられた。
「シ、シータ?」
形のいい唇が、目の前で斜めに歪んで開いた。
「み・に・く・い」

背筋が凍った。

「私がフウヤと、ちょっと仲良くした位でイライラしちゃうなんて。おまけにお人形なんかにヤキモチ焼いて。本当に醜い。そんな貴方が、どうして真っ白なフウヤの隣にいられると思ったの？」

「・・・!!」

カーリは身体中の血が足元に落ちるのを感じて、吐きそうになった。

「来るべきじゃなかったのよ。砂漠に、修道院に引っ込んでいるべきだった。こんなに醜い貴方だもの。ほおら、こんなに！」

相手の掴んだ自分の右手が、飴のようにドロドロ溶け出した。

「ひぃっ！」

ドロドロが腕を伝わって、蟲が這うように登って来る。そして喉元まで来て、口から入り込もうとした。

「い、いやぁ・・・」

強い指が肩を掴んで、激しく揺すぶられた。

――バシバシ――!!

いきなり往復の平手打ち。目の前でピシリと指を揃えるのは、憤りの表情の、黒髪のシータ。

「??!!」

意識を戻したカーリは、シータの後ろを見て仰天した。同じ顔のシータがもう一人、そこでたじろいでいるのだ。

平手打ちをしたシータが振り向いて、後ろの青白いシータを突き飛ばした。

「このトンチキ地霊(グール)！　うちの部落の新入りに、ちょっかい出すんじゃないわよ！」

雷のように罵られて、後ろのシータは、頭のてっぺんからみるみる溶けて、赤黒いのっぺらぼうになってしまった。

「消えなさい！」

シータの強い言霊で、のっぺらぼうはぺしゃんと崩れて、地べたに吸い込まれてしまった。

「あ…あぅぅ…」

半泣きで震えるカーリを、シータは斜面の倒木に誘(いざな)って腰掛けさせた。

「谷の地霊よ。ヒトの心の弱っている所につけ込む、タチの悪い奴。夜の山はあんなのが一杯湧いて出るから、ほっつき歩くモンじゃないわよ。それにしても、随分とディティールの狂った私だったコト！」

カーリは、赤くなって俯いた。自分の心の弱っている所がシータの姿をしていたなんて、罰悪い事この上ない。

「ま、いいわよ。似た者同士って事だもの、貴方とフウヤ」
「えっ?」
「フウヤも子供の頃、谷の地霊に襲われた事があってね。その時も、地霊が化けたのは私！　私、そんなに怖のいかしら?」
「へえっ、ホントに?」
やっとまともに受け答えしてくれた娘に、シータはホッと表情を柔らげた。

「貴方の捜し物はこれでしょう?」
ポケットから出されたモノを見て、カーリは小さく悲鳴を上げた。昼間、シータに会う一寸前、自分が崖の上から投げ捨てた、木彫りの人形！
あの時、シータがカーリから引ったくった布包みの中身は、空だった。シータが問いただす前に、カーリは後ろも見ずに、桑畑の道を駆け下ってしまったのだ。
「あのね、あの崖、下がえぐれているって言ったでしょ。落としたつもりでも、大概の物はそこに引っ掛かっているのよ」
言いながらシータは、反対側のポケットから、小さな鏡を取り出した。
「ダ、ダメェ!!」
カーリが弾かれたように飛び付いた。させるがままに人形を渡して、シータは済まなさそうに口を開いた。
「ごめんなさいね、もう見てしまったの…」
「……!!」
飴色の肌の娘は、元の皮膚の色が分からなくなる程、蒼白になった。

＊＊＊

「貴方が、人形と目を合わせてしまったのは…仕方がないわ。フウヤが注意しておかなかったのが悪いンだもの」
「……」
カーリは人形を懐に抱いて、そのまま消え入ってしまいそうに、背中を丸めた。
「そんなに落ち込む事ないわよ。普通の感情だわ。私、フウヤにも、誰にも言わな…」
「普通なものか!!」
いきなり絶叫して振り向いた娘に、それまで流暢に喋っていたシータも、黙らされた。
「あんな、自分勝手で、醜い…、あれが、わらわの本当の心だなんて…な・ん・て・・・」
叫ぶように発していた言葉がだんだんしぼんで、カーリはまた背中を丸めてうずくまってしまった。
「あんなに醜いわらわが、何でフウヤの側にいられよう・・・」

「ホントにお姫様ね…」
シータは静かな声音で言って、そっとカーリの背中に手を置いた。
「嫉妬とかした事ないの？。誰でも当たり前に持っている感情だわ」
カーリはまたダンマリになってしまったが、今度は黒髪の娘は、急いて言葉で畳み掛けたりしなかった。

「……清宮で育った…」
「うん…」
「生まれた時から決まった相手がいた。でも、清宮を出た時には、そのヒトはもう妻をめとっていて」
「……そう」
「どんなに頑張っても相手にして貰えなくて…。どんどん居場所がなくなって行って…。でも、他の皆が優しくしてくれたんだ。嬉しかった。自分もそれを真似して、ヒトを思いやって生きようと思った。そしたら、こんなわらわでも、皆に受け入れて貰えた」
「うん…」
「だからずっとそんな風に生きたかったのに。フウヤの事だと、静かな心になれない、抑えられない。また居場所をなくしてしまう…」
「……」
「やっぱり、どうしても、わらわは醜いのだ。清宮で、何かを欠いて育ってしまったのだ」
（ホントに、そうだわ…）
シータは言葉には出さず、心の中だけでつぶやいた。
飴色の肌の娘を映した人形は、本当に些細なワガママを喋っただけだった。フウヤに綺麗な女性を見て欲しくない、楽しくお喋りなんかして欲しくない。そんな、他愛もない、石ころみたいな、ヤキモチ…。
自分の中の小さな独占欲にすら、こんなにおののいてしまうなんて。まったく、この修道女は、どれ程のモノを欠いて生きて来たのだろう？

「それで、思わず人形を谷に投げちゃったのね」
「うん…」
カーリはまた、恥じ入りながら俯(うつむ)いた。
「怖くて恥ずかしくて、夢中で。でもシータに、大切なお姉ちゃん人形だったって聞いて…。ね、フウヤのお姉ちゃんはどこにいるんだ？　何としてでもたどり着いて、人形を元に戻して返さなきゃ」

「うーん、でも、フウヤには、人形は私が壊したって言っちゃった！」
シータはシレッと言って、紫の布包みを取り出して、中身の木端(こっぱ)をバラバラと落とした。
「ええっ?!」
「いつまでもこんな幻影と同居していちゃ駄目。遠くのお姉ちゃんより、近くの彼女を大切にすべきだわ」
「で、でも…」
「いいんだってば」
「……」
シータはカーリから人形を取り上げ、布に包んで、側の胡桃の木に登って、ウロに隠した。
「どうしても必要な事態が起きたら、ここに取りに来ればいいのよ。そうでなければ、こんな人形は無い方がいい。本心なんて、ヒトにだって自分にだって、見せるモノじゃないわ」
「シータ…」
「着いて来て」

シータは、谷の急な踏み跡を登り始めた。慣れている者でないと分からない、微かな道だ。所々引っ張り上げて貰いながら、フウフウ言って登ると、フウヤの家のすぐ下に出た。山の斜面に、捜索の松明が点々と見える。
「いらっしゃいな」
黒髪の娘は、スタスタと慣れた感じで、暗い留守宅に踏み入った。昼間はなかった小さなベッドが、窓辺におかれている。
「ふふふん」
すべてのカンテラを灯し終わったシータが、背中を向けて背伸びして、やにわに、壁に張られた地図を引っぺがした。
「シ、シータ!!」
慌てるカーリを尻目に、黒髪の女性は、壁一杯の地図を次々引き剥がして行く。
「まったく、こんなので隠して、しらじらしいったら!!」
呆気に取られたカーリだが、地図が剥がされるにつれて、そのレモン色の瞳は一杯に見開かれた。

漆喰の壁一杯に描かれていたのは、砂漠の青空を背景に、伸びやかに踊る舞姫。まだ幼さの残る少女時代のカーリから、上に重なるにつれて女性らしい身体つきになり、何人も、何人も。
「・・・・!!」
「己の才能に行き詰まって苦悩する駆け出し彫刻家の前に、ある日、豆菓子を持った天使が降って来て…って、そんな物語を、ボケ老人のリフレインみたいに、何回も何回も聞かされたわ。

その天使さんを、何で今、私が、励まさなきゃなんないの?!　本当に馬鹿馬鹿しいったら!」
　ただただ立ち尽くすカーリに、シータは鼻から息を吐きながら、隅の木箱を目で指した。
「そっちの巻き紙も、みんな貴方の絵。一つ一つ開いて見る?　別にいいわよね」
「……」
「満足した?　ここは貴方が来る前から、『貴方の家』だったのよ。じゃあ、地図を元通り張るの、手伝って頂戴」
「えっ?」
「ヒトの心なんてそうそう覗き見するモノじゃないわ。…そうでしょ?」
　作業はカーリに任せて、シータは外に出て、谷に向かって指笛を吹いた。
　――　ピィーーー・・ピッピッピッ・・　――
『無事見つかった』の合図なんだろう。谷に散っていた松明が、安堵の様子で登り始めた。
　地図を張り終わったカーリの手を引いて、二人窓辺で並んでそれを見つめる。
「三峰の女達はね、こうやって、山を駆ける男達を心配しながら、待つの」
「…そう…」
「ねえ、カーリ、貴方、居場所をなくすのが怖い…って言っていたじゃない。居場所を貰うんじゃなくて、これから貴方が、フウヤの居場所を作るのよ」
「…ん、…うん!」
「こんなクサイ言い方しか出来なくてゴメン、だけど」
「ううん、シータ、ありがとう、シータ」
＊＊＊
　桑畑の入り口まで歩いた所で、部落の入り口からフウヤが駆けて来た。カーリが今まで見た事ない位速い…っていうか、のんびり屋のフウヤが全力で走るのを、初めて見た。
「うああ――!　カーリィ!!」
　いきなり人前で抱きすくめられた。こんなフウヤも見た事ない。
「どこ行ってたんだよ!　あああ、めっちゃビビった!」
「ごめん…フウヤ…」
「谷に見えた残雪に触ってみたかったんですって」
　シータが手のひらでパタパタと頬を扇ぎながら、ゆっくり歩いて来た。
「急斜面で、前にも後ろにも進めなくなっていたのよ。まった

く、砂漠のお姫様は人騒がせだわ」

シータはウインクして立ち去り、カーリは捜索してくれたヤンと若い衆に、丁寧に詫びた。

青い月の桑畑を、フウヤと肩を並べて歩く。

カーリは本当の事を話すか、迷っていた。シータは言わなくてもいいって言ってくれたけれど、嘘は重ねねばならないし、いつかほころびる。

「人形…」

フウヤの方から切り出されて、カーリはビクッとなった。

「話してなくてごめんな。お姉ちゃんに会えた？」

「あ…、うん、ちょっとだけ」

「よかった。カーリに、僕を育ててくれたお姉ちゃんに会って貰いたかったから。だからあの人形は、もう役目を終えたんだ」

「……」

本物のお姉ちゃんには会わなくてもいいの？

そういう質問はしなかった。フウヤが今話さないんなら、聞かない。今すぐ全部は知らなくていい。今すぐに全部知って貰わなくてもいい。

青白い月は山陵近くに移動し、光をレモン色に変えている。

「ほい」

フウヤが歩きながら何か手渡してくれた。

青い小さい花房（はなぶさ）。

「エンゴサク。登って来る時、雪渓の中に見付けた。雪の下にはこんなのが一杯眠ってる。これからカーリに、次々見せてあげられるよ」

カーリは、両手の間の清々とした青い色を、じっと見つめた。灰色の雪の下に、こんなに鮮やかな色が眠っているなんて！

自分は今まで、表面の白い色を見ていただけなんだ。きっとこれから、その下にある様々な色を見る事になる。それが、二人で生きるって事なんだ。

見上げた月の下、二人の歩く道は、柔らかいレモン色に照されていた。

～おしまい～

二〇一一・九・二十一

フウヤ悪いけれど
貴方の家のオタギー金閣壁画カーリにバラしちゃった
うへえ～まぁ、しようがないか…
壁画だけならね…
勿論よ本当にヤバイアレとかコレとか例のヤツとかはバラさないであげたから
ヘボイ隠し方しかできないなら処分しなさい結婚するんでしょあなた